



これまでの春・夏・秋号では、特集テーマをそれぞれ「安心」「葛藤」「探求」としてきたが、その締めくくりが今回の「協調性」。子どもの成長、生活の深まりゆくプロセスで組み立ててみた。年長クラスになると、子ども同士が個々の思いや考えを相互に生かしつつ、集団の中で自分が生かされることに喜びを見いだし、新たな自立心が育つ。園生活の高い教育的機能が明らかである。

「そもそも、「協調」とは「利害の対立した双方がおだやかに相互間の問題を解決しようとする事」とだという(広辞苑)。この「おだやかに」の文化差は大きくそうだ。「以心伝心」や「空気を読む」ことを大事にする日本人は真正面から反対意見を言うのをはばかりる傾向がある。「協調性がない」「付き合えない」と思われたくないのだ。言葉によって自己主張することを重視する欧米的価値観とは大きく違う。北山氏が子ども社会にも及ぶ「同調圧力」がSNSによって深刻化していると警鐘を鳴らしておられるが、大人社会の価値観がその根底にあることをどうしたらよいのだろうか。前原氏と佐藤氏の論考では、大人と子どもとの協調性の違いが興味深かった。大人たちは、ギブ・アンド・テイクの等価交換を協調の条件にしてしまいがちだという。一方で子どもたちは、ちぐはぐな関係性の中でも遊びを自ら育み、しかしそばにいて相補的な動きをしながら、偶然の笑いで関係が融合していく。「協調」を超えているような気もする。森氏には、物質世界のまとまりを生成する協同(協調)について教えていただいた。モノの世界にも協調という考え方が生きることが面白い。(H)

\*特集「保育現場で気になるコトバ考」は今回で終了します。